

日常でもマーケットのことを考えるのが楽しいんです

たき火で野菜や季節の味覚を楽しむ「ラボブース」で活動する南波美帆さんは、市外在住。北本に関わる以前はデンマークへ一年留学していた。現地では、国籍も年齢も様々な人々とサステナブルな暮らしについて対話する時間を過ごした。帰国し「マーケットの学校」に参加した時にデンマークの学校と似た雰囲気を感じた。「20代から退職後の人まで互いに尊重し合うのが居心地良くて。自分の思いついたことを言っても引かれない安心感があります」

「ラボ」では、毎回新しいアイデア

アにチャレンジする。「マーケットで知り合った人にアレルギーがある人がいて、そういう人とも一緒に楽しみたいなど、小麦や卵を使わないパンを考えたり。マーケットで出すことで、それを見て喜んでくれる人がいるのが嬉しいですね」と語る。日常でもマーケットで使えるようなアイデアを拾っておくようになり、生活に彩りが増えたという。

また、&green marketを通して北本に居場所が増えていった。「今井さん（左ページ）のお家で栗拾いをしたり、わらの会さんの田んぼの学校に参加して田植えをしたりとか。自分では

広い庭や田んぼを持ってなくても、憧れの暮らしが&green marketでつながった人や場を通じてできるようになりました。ここで知り合った人たちは、気軽に頼れる親戚とか友達みたいな感じですよ」



西村一孝さん

南波美帆さん

「地域の実家」を作りたい

「ラボブース」でたき火仕事を引き受ける西村一孝さんは、&green marketを活用して自治会や周辺の飲食店を繋げたいと考えている。

北本市役所が位置する本町1丁目の自治会では、2か月に1回ほど、地域のお年寄りが集まっておしゃべりを楽しむ「ホットサロン」を開催していて、西村さんの「近所さんも楽しみにしていたという。しかし、コロナ禍で解散することが決まった。そこで、西村さんはホット

サロンに代わる居場所づくりとして&green marketを使うように考えた。昨年、自治会長に就任することになり、自治会予算の範囲でマーケットのクーポン券の発行を提案。自治会や地域の人たちがマーケットに関わるきっかけになった。今年の自治会長にも関係を繋げ、7月16日のマーケットには、本町1丁目自治会が出店者として参加。子どもたちにもゲームやくじ引きを楽しんでもらった。

「自治会の加入率が下がっている中で、その地域の人たち全員のことを見るのは難しい。でも、目の届く範囲で繋がりが合って、地域の子どもたちをみんなで見守るような関係ができると思いますよ」西村さんは、それを「地域の実家」と呼ぶ。

「これから先はね、&green marketや周辺のお店で使える地域通貨を作りたいんですよ」西村さんのアイデアは止まらない。

わたしの&green marketストーリー

出店だけじゃない 楽しみ方を 知りました

ワイヤークラフトの作品販売やワークショップを行う「09 Create」わくわくクラフト」の和久津早苗さん。針金でアクセサリから立体物まで作ることができるワイヤークラフトのおもしろさを知り、6、7年前からさまざまなマーケットに出店してきた。

「北本の『マーケットの学校』に参加したのは、出店先が増えたらいいなというのが正直なところでした」と語る。ところが、参加してみると、自分のように出店したい側の参加者は他におらず、多くがマーケットを作ることに興味を持つ人たちが多かった。「他の人たちの話を聞いて、自分は作家として参加する場面しか見てなかったんだなっていうのを感じました。準備する大変さとかもよくわかってすごくいい経験でした」

&green marketでは他の出店者さんの準備を手伝ったり、今井さん

ずっと北本で マーケットをやりたいかった

「今井さんちの新鮮野菜」では、今井邦夫さんの自宅で採れたもののほか、近所の農家さんから集めた野菜が軽トラックに並ぶ。

「北本でこんな野菜が採れるんだよって知ってもらいたいのと、近隣で食べきれずにいる野菜を無駄にしたくないっていう想いがあるんですよ」と今井さんは語る。今井さん自身は、農家のかたわらレザー作家としても活動し、市外のマーケットに出店したこともある。しかし、出店した中では自分の理想とするマーケットは見つからなかった。それならば、自分でマーケットをやりたい、やるなら北本でと企画書を作り、様々な施設を回ったが話が進まなかった。そんな時期に、「マーケットの学校」を知り、参加を決めたという。

&green marketでは、他のブースで野菜を売る子どもたちに「この野菜はなんで無農薬って言わないの?」と聞かれる

(左ページ)のところで野菜を買ったり、お昼の食べ物を他の出店者に予約しておいたり、和久津さん自身がマーケットそのものを楽しむようになった。「ワークショップを早く片付けてラボブースでまったりしたいなと思うようになりました(笑)。そんなこと今までなかったんですけどね」

芝生でお昼を食べる家族の姿や楽器の生演奏をしている様子を眺めて素敵だなと感じるようになった。マーケット全体を見渡す視点を持つようになったのも、新しい発見だ。「作家仲間にも『&green marketに出たい』とよく言われるんですけど、『まずは一回来てみてよ』って言ってます。売り上げとかじゃない、このマーケットならではの良さをわかってもらいたいです」

ことがある。「無農薬」の意味をちゃんと教えたい。あの子たちが将来農業でも食ってけるようになるって伝えたいなって。そういうやりとりは面白いよね」一方で、「あのブースはうまく回ってるかなとか周りが気になっちゃう」のだからという。自らマーケットをやりたいと考えているからこそ、常に全体を観察している。そんな今井さんは、ついに今年10月、自身が企画した「きたもとクラフトマーケット」を開催する。

「僕自身は何も出店しないで見ているだけだと思っただけ。それで満ち足りちゃって」長年の目標達成まで、あと少しだ。



今井邦夫さん



和久津早苗さん